



Title	サブカルサブリ第27回：ゆるキャラ文化の進化論：「幼稚さ」の動物行動学的考察
Author(s)	山村, 高淑
Citation	埼玉新聞
Issue Date	2013-11-23
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/53737
Type	column
File Information	20131123Saitamania subcul suppl No.27.pdf



[Instructions for use](#)

山村高淑教授の

サブカル サブリ

アニメや漫画の舞台地が多いサブカル王国・埼玉。その魅力を「アニメツーリズム」の専門家、山村高淑氏が紹介する。



ゆるキャラを見てみると、競争心や闘争心が一気に削がれ、なんだか力が抜けて、安心してしまいます。まさにそうさせる造形や態度こそ、ゆるキャラの持つ「ゆるさ」です。昨年の本コラムでも、ゆるキャラの持つ「幼稚さ(子供っぽさ)」が、ひよつとしたら自治体間の過度の競争を避け、共存していくための重要な役割を果たしているのではないかと指摘しました(2012年11月23日版サイタマニア)。今回はもう少し深掘してみたいと思います。

愛着生む「幼稚な造形」

まずその造形的特徴から考えてみましょう。

①頭が身体に比べて大きい②額は広く、前に突き出る③目は大きく、顔の中央よりやや下に位置する④四肢は短く太い⑤体型は全体に丸みを帯びる⑥体表面は柔らかい⑦頬は丸く豊か:

これらは、昨今のゆるキャラに共通する造形的特徴...ではなく、オーストリアの動物行動学者、コンラート・ローレンツ博士が194

ゆるキャラ文化の進化論

「幼稚さ」の動物行動学的考察

3年に提唱した、動物の乳児や幼児が持つ身体的特徴、すなわちベビースキーマです。

博士によれば、こうした身体的特徴を持つことによつて、乳児や幼児は、大人から「かわいい」という感情を引き出し、攻撃を抑制するとともに世話行動を誘発するのだといいます。また人間の子供だけでなく、幼い動物、さらには動物以外でもこうした特徴を持つキャラクターに対して、私たちが「かわいい」「守ってあげたい」という感情を抱くのも、このベビースキーマによるところが大きいと考えられます。

ゆるキャラのデザインの多くが、このベビースキーマに見事に当てはまります。ゆるキャラを見ると、闘争心が消え失せ、ついつい力が抜けて笑顔になつてしまふ理由の一つはおそらくこれなのです。ゆるキャラに接する人たちの態度が、幼児に対する態度と酷似していることもうなずけます。

「幼稚な態度」攻撃を回避

ゆるキャラの幼稚さを形作るも

う一つの重要なポイントはその態度です。よたよた、ふらふらと歩き、時に転び、身振り手振りは如何にも大げさでこちない...これもまさに動物の幼児が持つ特徴です。

動物行動学的には、幼児的な行動は他者の攻撃を回避する作用を持つとされます。オオカミやイヌが仰向けになり腹を見せる服従の姿勢などはその典型例です。私たちがゆるキャラに対して全くと言っていいほど闘争心や敵対心を抱かない理由の一つも、おそらくその幼児的な行動にあります。

ちなみに、群れで共同作業をして暮らす動物は、こうした幼児の時の特徴を成熟後も保持することで、高い攻撃性や縄張り意識を弱め、柔軟性の無さを回避していると言います。いわゆる「ネオテニー(幼形成熟)」です。

一説には、人類はその進化のプロセスにおいて幼形成熟という選択をする事によつて、祖先のサルが持ついた攻撃性を希薄化し、協調性を高めることができたと言います。だからこそ、他のサルには見られない巨大な集団で協力して生活することができるのだと言

人類進化の究極形態？

動物学者のクライブ・プロムホールは、ネオテニー(幼形成熟)について、その著書『幼児化するヒト』(河出書房新社)で次のように述べています。「幼形化は、緊張を和らげて争いを減らし、乱暴な政治的策略をなくすという(中略)効果によつて、私たちの祖先が団結力と協調性のある大集団を形成できるようにし... (以下略)」。

ついでに言えば、体毛が薄い等々、その形態的特質から、人類の中でも最もネオテニーが進んでいるのは日本人をはじめとするモンゴロイドだとする説もあります。攻撃性が低く、協調性が高いだけでなく、好奇心があり、学習意欲が高いのもネオテニーの特質とのこと。

日本のゆるキャラ文化やオタク文化を、そうした人類進化の上に位置付けて考えてみると、人類進化のある種の究極形態が見えてくるような気がしています。

●プロフィール

やまむら・たかよし：北海道大学観光学高等研究センター教授。埼玉県アニメツーリズム検討委員会座長。